

結論は、本当のことは、真実は、言葉で伝えることができな
いうことです。

なぜ、そう言えるのでしょうか。

世の中は、形で示された世界が本当の世界だということから成
り立っています。

形で示された世界というのは、目や耳や鼻や舌、皮膚で知る世界
です。

特に、人は、目で見て、耳で聞いた情報を基にしていきます。

そして、自分の考えや思いを相手に伝える手段として、言葉を使

います。

確かに、生活を営んでいくために必要なことは、言葉にしないと正確に伝わらないでしょう。

中には、互いに言葉に出さなくても、互いの調子や気持ちが一致するとか、思いは通じ合っているということ、阿吽あうんの呼吸ということや、以心伝心ということもあります。

しかし、それらもまた、所詮は、形で示された世界の中のことです。その世界を本物としています。

ところが、そうではなくて、本当に、思えば通じる世界というものがあるのです。

その世界には、形で示されたものが本物だという思いはありません

ん。形はなく、ただ「思い」があるだけの世界です。

ここで、少し自分のことを言わせていただくならば、ほとんどの人が、形の世界が本物だと疑うことがない中で、私は、思えば通じる世界だけが本物だと思っています。

確かに、目に見えて耳に聞こえて、触れることができる現実が、ここにありません。

しかし、それは、私が本当に知りたかった世界（意識、波動の世界）を、自分の心で知るために、私自身が用意してきたものに過ぎないことを、私は感じているのです。

そのために、必要なものは自分の周りに現れて、そのために、必

要でないものは、消えていくのだと感じています。

だから、目の前に現れたからどう、消えたからどうということに
対するこだわりは、薄くなりました。

そして、現れた、消えたよりも、現れたときの自分の心、消えて
いったときの自分の心の動きを、しっかりと見つめていこうと思う
だけとなったのが、「心の学び」を続けてきた結果です。

目に見えること、耳に聞こえることよりも、自分の心で感じ、自
分の心に響いてくるものを道しるべにして、これからの時を刻んで
いこう、そうすることが、私自身が本当に知りたかったことだった
という結論に至っています。

再び、「心の学び」へ話を戻します。

確かに、学びの輪は、今現在、大きく広がっていますが、今の自分の生活なり、環境の中に留まっている人が大半です。

目に見えて耳に聞こえる現実を前にして、自分の心で感じる世界を主にしていくことは、確かに難しいです。

夫であるとか、妻、親や子、そして、その他の自分を取り巻く人との繋がり、あるいは環境に比重を置きながら、心の学びをやっくいこうとする人達が多いのも無理のないことでしょう。

そして、世の中を見渡せば、そのような人、人、人です。

たとえば、思いは通じるとか、願いは届くとか、そういうことを信じている人も、思いの世界（意識、波動の世界）がすべてだとは思

っていないのです。

やはり、形で示されているもの、そして、それらは、自分達の五官、つまり目、耳、鼻、舌、皮膚で確認されるものですが、その確認がなければならぬ、確認がほしい、確認があつてこそ信じられる、ほとんどすべての人が、そう思っているのではないのでしょうか。

そのような中で、目や耳などの五官で確認される世界、つまり、形で示された世界は、実は、影の世界であり、本当の世界ではないということ、私達は学ぶ機会を得たのが、今という時間でした。

しかも、それは自分の心でしか分からないことなので、どうぞ、心を見ていくことをやっていきましよう、と、田池留吉氏が伝えてくれたのです。

もう少し、思いの世界（意識、波動の世界）ということについて、語らせてください。

私達から出てくる言葉や、態度には、その本もとになる思いがありません。

何かを思っているから、あるいは感じているから、私達は、それを言葉や態度で示していくのです。

その思いの世界を、意識の世界、あるいは波動の世界と言ってきました。

その世界を、あなたが「心を見る」ということを通して、あなた自身の心で、じっくりと感じていきましようということなのです。

どんな言葉を吐いてもいいし、どんな態度を出してもいいのですが、その言葉を吐いた、その態度を示した、その時の自分の思いを辿っていいこうということです。

言葉を吐き、態度を示したときに、どのような思いが心に上がってきたのかを確認するのです。

あるいは、何も語らなくても、態度に出さなくても、相手に対して、あるいは物事に対して、瞬間的に心に突き上がってくる思い、エネルギーを感じるはずですよ。

それを、自分の中で追っていいこうということなのです。

人は他人を騙せても、自分を決して騙せません。

顔で笑って心で泣いて、顔で笑って心でこん畜生、そうであるな

らば、その泣いた自分、こん畜生の自分が、波動、エネルギーとなつて流れていく世界が、本当の世界であると、私は感じています。

実は、「心を見る」という学びが、宗教や精神世界、心理学といった分野ではないという所以ゆえんがここにあります。

人は、なぜ、神、仏の道を究めようとか、心理学や哲学を学ぼうとするのでしょうか。

道を究める、学問をするといつても、結局、そういうもので自分を高めていく、立派にしていく、自分の格付けをしようということだと思います。

あるいは、そういうもので、自分を救ってほしい、解決方法を見出したいということだと思えます。

難解な仏典、経典、書物を読みこなしても、所詮、それらは知識
でしかありません。

しかし、知識だけでは本当のことは分からないのです。

人の頭脳には限界があります。

だから、人は、さらに、修行を積むのでしょうか。

そして、心が救われた、心が洗われたようだと感じても、そのあ
なたが言う「心」とはどのようなものなのでしょうか。

「心」の実体が、そうすることによって、解き明かされていないこ
とは、これまでの歴史が証明していると思います。

そこで、私は、

『本当のことは、頭では分からない。』

本当のことは、姿、形、言動でも分からない。

本当のことは、あなたが感じていくしかない。

そして、本当のことを、あなたが感じていくには、「心を見る」実践しかありません』

と、強調します。

さうして、

『宗教や精神世界、哲学、文学、心理学、科学の分野では、私達人間の本質を解き明かすことはできません』

と、はっきりと言います。

つまり、

『「心を見る」という実践がなければ、何も分かりません』と、重ねて強調します。

そして、結論は、

『私達は意識です。今、私達は、肉体という形を持っているけれども、私達の本当の姿は、目に見えないものなのです。』

このことが、自分の中ではつきりと信じていることができるように、心を見ていきましょう』

ということですよ。

もう少し、説明を加えれば、

『私達は、心として、エネルギーとして存在し、決して消えてなくなるものではないのです』

ということですよ。

確かに、この肉体は、時が来れば消滅します。それを私達は、死と呼んでいます。

しかし、死というのは、私達にとって、今の肉体を脱ぎ捨てるひとつの行事にしか過ぎないのであって、死んだから、その人が消えてなくなるのではなくて、その人が纏まとっていた肉体というものがなくなるだけなのです。

やがて、また、私達は別の肉体を携えて、この形の世界に出てく

るのです。

このような循環を、人は転生と呼んできました。

それでは、

「なぜ、私達は転生を繰り返してきたのでしょうか」

「私達にとって、この肉体というものはどういう意味があるのでし

ょうか……」

ということが続いていくのです。

これらに関しての詳しい内容については、UTAブックさんから、すでに九冊の本が発行されていますので、そちらのほうを、ぜひ参照してください。

特に、「意識の流れ」「続意識の流れ」「意識の転回」を読まれる